

青 谷 川 古 墳 群
青 谷 川 製 鉄 関 連 遺 跡

1990年3月

総社市教育委員会

序

総社市は、古代吉備文化発祥の地として栄え、独自の歴史的風土を形成しています。市内にはそれをものがたる数多くの文化財が残され、とくに埋蔵文化財については優れたものが多く、それらを保存し、活用していく必要があります。

今回の発掘調査は、民間の霊園開発に伴って実施したものです。発掘調査の結果、鉄づくりに必要な木炭をつくるための炭窯を廃棄して、そこに古墳が造られていたということがわかりました。このことは炭窯の使われていた時期を知るうえで、考古学的に貴重な資料となります。

また、2基の古墳の内、1基については霊園の敷地内に現状のまま保存することができました。これも事業者である宗教法人報恩寺をはじめ、関係各位の多大なる御協力と御指導のおかげと存じます。厚くお礼を申し上げます。

平成2年3月

総社市教育委員会

教育長 浅 沼 力

例 言

1. 本書は、宗教法人報恩寺が計画をしている霊園の造成に伴う、「青谷川古墳群」「青谷川製鉄関連遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、宗教法人報恩寺からの委託を受け、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導助言のもとに実施した。
3. 現地調査は、昭和63年10月12日から10月28日にかけて行い、整理作業は平成元年度に実施した。
4. 本書で使用した方位は座標北に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本書は、村上幸雄、前角和夫が執筆し、前角が編集した。
6. 出土遺物や写真、図面等については、総社市教育委員会で保管している。

目 次

序	
例 言	
1. 調査の経緯	1
(1) 調査にいたる経緯	1
(2) 調査の体制	3
2. 位置と環境	5
3. 青谷川古墳群の調査	7
(1) 古墳群の位置と環境	7
(2) 青谷川2号墳	9
(3) 青谷川3号墳	15
4. 青谷川製鉄関連遺跡の調査	17
5. まとめ	21

挿 図 目 次

第1図 霊園計画平面図 (S = 1/800)	2
第2図 調査地位置図 (S = 1/25,000)	4
第3図 青谷川古墳群周辺遺跡分布図 (S = 1/10,000)	6
第4図 青谷川2, 3号墳配置図 (S = 1/500)	8
第5図 青谷川2号墳墳丘測量図 (S = 1/200)	9
第6図 土層断面図 (S = 1/100)	10
第7図 遺物出土状況図 (S = 1/50)	11
第8図 出土遺物 (S = 1/3)	12
第9図 2号墳周辺出土遺物 (S = 1/3)	14
第10図 青谷川3号墳墳丘測量図 (S = 1/200)	15
第11図 土層断面図 (S = 1/100)	16
第12図 石室実測図 (S = 1/60)	16
第13図 1号炭窯平面図・立面図 (S = 1/80)	19
第14図 断面図 (S = 1/80)	20

図 版 目 次

図版 1	調査地全景	23
図版 2	1. 2号墳調査前 2. 2号墳調査後	24
図版 3	遺物出土状況	25
図版 4	1. 奥壁側トレンチ断面 2. 石室前部トレンチ断面	26
図版 5	1. 3号墳調査前 2. 奥壁側トレンチ断面	27
図版 6	1号炭窯	28
図版 7	1. 掻き出し口の残石 2. 炭窯と古墳	29
図版 8	出土遺物	30
図版 9	出土遺物	31
図版 10	1. 出土遺物 2. 3号墳石室	32

1. 調査の経緯

(1) 調査にいたる経緯

報恩寺は、総社市小寺に所在し、臨済宗東福寺派中本山の井山宝福寺の末寺にあたる。本寺は、戦国時代の土着国人衆中島家の菩提寺であり、一般の檀家はもたない寺である。しかし、近年は総社市域が岡山、倉敷のベッドタウンとして脚光をあび、新興住宅団地があいついで誕生し、またそれに伴って霊園の需要も増加する傾向にある。本寺近辺にも市内最大の戸数850戸の泉団地や中須加団地、浅尾市宮住宅などが建設され、かつてのどかな田園風景を変貌させている。こうした状況にあって、昭和63年夏頃になって、本寺による霊園造成が市内小寺地区において計画された。

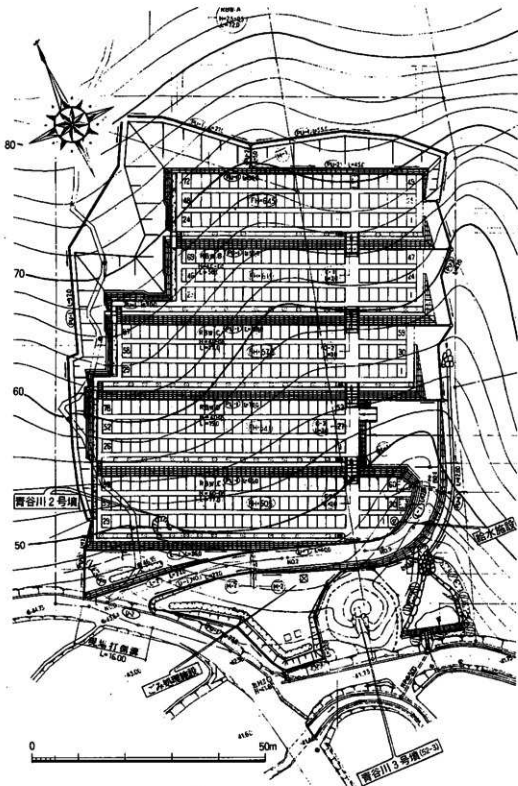
計画地は、泉団地背後の標高150m余の南斜面9,899㎡におよぶ。この地に1区画6㎡の霊園390区画と進入路、駐車場等が建設される計画であった。

計画地周辺には、横穴式石室を内部主体とする3基からなる青谷川古墳群があり、うち1号墳を除く2基が計画地内に含まれていた。このため、計画段階で文化財の有無を確認するため来庁した事業者はその旨を伝え、できるだけ現状保存を計るような方法での設計を依頼すると共に、教育委員会と緊密な連絡をとり協議するよう要請した。しかし2号墳については、確実に古墳とするには疑問もあり、計画進行段階で確認調査を実施することとした。

やがて設計が具体化し、3号墳は現状保存となったが、事業者の認識不足もあってその範囲は墳丘のみとなり、周溝が除外されていたため修正を要請し、現地でのその範囲について立会した。2号墳は先述した事情もあり、昭和63年9月28日に確認調査を実施し、石材は抜き取られているらしいものの地山面の掘り方の状況からみて、横穴式石室墳の感触を得ると共に、流土中に焼土塊の混入していることから、近辺に製炭窯とされる窯状遺構が存在することが推定された。2、3号墳は、麓下の緩斜面に所在するものの、それより上方は急傾斜面であり、造成計画上2号墳を現状保存することは駐車場の確保、進入路の大幅な変更とそれに伴う霊園区画数の減少を招くと共に、2号墳そのものが石材を抜き取られて墳丘のみが馬蹄形状に残る現状からみても保存は困難であり、止むなく記録保存として発掘調査を実施することとした。

なお、2号墳の調査中、隣接して窯状遺構が1基検出され、調査を実施した。

(村上幸雄)



第1図 建設計画平面図

(2) 調査の体制

発掘調査は、宗教法人報恩寺からの委託を受け、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもとに実施することとなった。現地での調査は昭和63年10月12日より10月28日まで行い、整理作業は平成元年度内に実施した。

調査にあたり、宗教法人報恩寺には経費の全額負担をはじめとして多くの便宜をはかっていただいた。また造成工事を担当した柳渡辺組、下山仁司土地家屋調査士事務所には調査範囲内の伐採、バックホーによる表土除去や墳丘測量などについて労を煩わした。記して厚く謝意を表します。

調査組織

社会教育課（文化係）

課長 樋口文男

主幹 村上幸雄（調査担当）

主任 森田忠志（庶務担当）

主事 三宅正吉（庶務担当）

“ 谷山雅彦（調査担当）

“ 高田明人（調査担当）

主事補 前角和夫（調査担当）

作業員 岡野 泰、栢野明太、河原振一、杭田恒一、佐田野節、白神兼夫、武田一雄、富岡 広（発掘作業員）、西平登代子（整理作業員）

なお発掘調査にあたって、下記の方々から多くの御指導と御教示を得たことを記し、厚くお礼申し上げます。

葛原克人、伊藤 晃、中野雅美、武田恭彰、弘田和司、草原孝典、小郷利幸、渡辺 勲、後藤信義

調査方法

発掘調査は、青谷川2号墳と青谷川3号墳の一部について実施した。2号墳については全面調査による記録保存とし、3号墳については現状保存となったが、その保存範囲を確定するため、周溝部分についてトレンチ調査を行った。また、調査を開始した直後、窯体の側面に複数ほき出し口を取り付けている炭窯が2号墳に隣接して検出され、これについては開発の範囲内で全面調査を実施した。



第2圖 調査地位位置圖

現地調査では、表土の除去、あるいは排土の運搬などにバックホーを用い、その後人力で遺構の検出などを行った。

実測図は、填丘測量図を除く平面・土層断面・立面各図を $\frac{1}{50}$ の縮尺で作図した。また填丘測量図は、 $\frac{1}{100}$ の縮尺で平板測量を行った。

(前角和夫)

2. 位置と環境

青谷川2号墳は、総社市小寺1664-1番地に所在する。

高梁川左岸の標高247mの秋葉山山頂に立つと、南の眼下には広大な総社平野が拡がり、さらに四国の山並みまで視野に捉えることができる。右下方には県下三大河川の一つ高梁川が帯のごとく走り、瀬戸内へと注ぐ。一転して北を望めば標高500~600mの吉備高原が遠く霞む。

本古墳は、この秋葉山山頂から、狭長な谷を挟んだ東南東の山裾に所在している。古墳の立地する標高180mの山頂から、北、西、南斜面はかなり急傾斜を呈しているが、南東斜面はやや緩やかとなり、幾条かの狭小な尾根が派生している。本墳が位置するのは、山裾に近い南斜面の傾斜変換点墳の緩傾斜で、水田面との比高は5mである。西80mのほぼ同高位に青谷川1号墳があり、南東30m下方に3号墳が所在する。

総社平野は、肥沃で広大な平野である。早くから先人たちの活動の場として利され、強大な勢威を誇った古代吉備の中核地である。その活動は先土器時代に始まり、本古墳群近くの宝福寺裏山や浅尾の丘陵でサヌカイト製のナイフ形石器など数個が採集されている。縄文時代の遺構は明確でないが、総社平野内の独立小丘陵の長良山地区、高梁川の支流新本川右岸の長瀬地区で早期の押型文片等が出土しており、また高梁川を少し廻ったケンギョウ田遺跡で前・後期の土器、石器が出土している。また平野内の中心部にあたる真壁遺跡では、早・後・晩期の遺物が出土しており、次代への胎動がみられる。

米作りの開始は、総社平野という肥沃な沖積地をもつこの地では、大きな転換期となった。平地部での発掘調査例は少ないが、真壁遺跡では前・後期の多数の遺構が検出されており、拠点集落の可能性が考えられている。弥生人の活動は平地部にとどまらず、中期後半には周辺の丘陵部や山間部にまで及び、多数の集落が形成された。後期になると集落数はより増加し、やがて立坂・伊与部山・宮山などの弥生墳丘墓を築造しうる階層の誕生をみた。古墳の導入も早く、高梁川を見下ろす右岸丘陵上には三角縁神獣鏡を出土した備中最古の上沼古墳がある。五世紀代に入ると古墳の築造はより盛行し、大形墳はいうに及ばず群集小墳も各地域に築造され



1. 青谷川1号墳 2. 青谷川2号墳 3. 青谷川3号墳 4. 大谷古墳群 (8基) 5. 塚坂古墳群 (31基) 6. すりばち池古墳群 (4基、うち1基消滅) 7. 高池古墳群 (4基、うち3基消滅) 8. 赤坂古墳群 (3基) 9. 井田古墳群 10. ヒイゴ池古墳群 (4基) 11. 青谷川斜紋関連遺跡 (●印は古墳、○印は位置不確定な古墳、△印は炭室を示す。)

第3図 青谷川古墳群周辺遺跡分布図

た。その頂点は全土的にみても第9位に列する作山古墳にみることができよう。横穴式石室に表徴される後期古墳の築造は、これまで古墳の築造をみなかった地域にまで及び、平野の縁辺部はいうに及ばず、山間部にも多くの古墳群がみられる。

本墳の周辺をみても、谷を挟んだ前方の丘陵上には6基からなるすりばち池古墳群⁽¹⁾が、また隣接する東の尾根上には8基の大谷古墳群が位置する。さらに本墳から谷部を200mほど遡上った支谷の斜面裾部には30余基の塔板古墳群が所在する。本墳や塔板古墳群のある谷部は、平野部から北部へ通ずる当時の街道を形成していたものと考えられる。

最後に本墳の調査途次に製鉄用製炭窯が検出され、調査されたのでそれに関連してふれておきたい。昭和62年冬、総社市新本・久代で総計60基の製鉄炉と16基の製炭窯が調査された⁽²⁾。詳細は近刊予定の報告書にゆずるが、いずれも7世紀代のものと考えられる。本墳の調査途次に発見された製炭窯も同種のものであり、さらに調査区外であるが塔板古墳群の入口にあたる山道の断面及び塔板峠を少し降ったかつての街道沿いの林道法面にも同種の製炭窯がみられる。衰勢の吉備とはいえその中枢縁辺部であり、なお盛んに製鉄が行われていたことを傍証している。いまだ所在の明かでない備中国府跡も、総社平野内のいづこかであろうことは疑いない。本墳はそうした歴史的な環境の中に築造された群集墳の一つである。

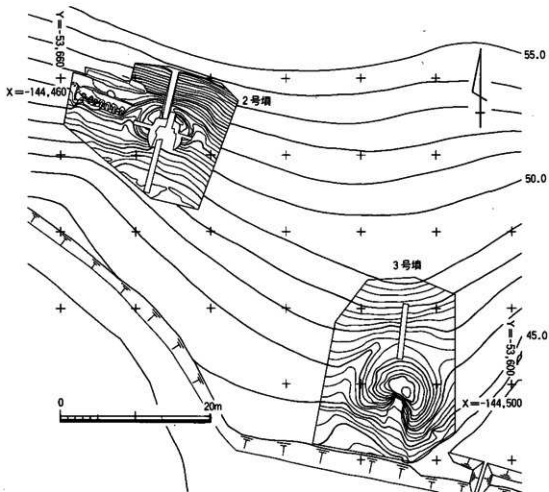
(村上)

3. 青谷川古墳群の調査

(1) 古墳群の位置と環境

今回の調査対象の青谷川古墳群は、総社市小寺字兎道および同福井字大塚に所在する。古墳群は標高178mを測る山塊の南斜面に3基の存在が知られており、いずれも横穴式石室を内部主体とする円墳である。この3基は標高45～55mの間に並列しており、いずれも谷すじにあたる南に向かって開口している。

1号墳は、3基のうちの西端に位置しており、2号墳との距離はおよそ35mになる。この古墳の墳丘は直径約8～9m、高さ約1.5～2mを測り、幅約2mの周溝が取り巻く。内部主体は横穴式石室であるが、石室の石材は奥壁と思われる位置に3段の石積みが見られるほか、墳丘の中央部に3×5m、深さ1.5mの土坑が穿たれている。おそらく石材の多くは抜き取られたものと推定される。石室の規模は、土坑の状態からみると全長5～6mほどと考えられ、石室幅は奥壁の石材幅が1mであることからこれに近い数値になろう。なお、石室の軸はほ



第4図 齊谷川2号、3号墳配置図

ば南で、使用されている石材は花崗岩である。

2号墳は、今回全面調査を行った古墳である。調査前の状況では、横穴式石室を内部主体とする径約7～8m、高さ約1.5m位の円墳と考えられた。しかし墳丘の中央には2.5×4m、深さ1.5mほどの大きな土坑が穿たれており、石室の石材はすべて抜き取られているものと思われた。周溝は奥壁側で、古墳を構築するために丘陵斜面を大きく削り取ったことで生じた斜面カットがほんのわずかの段として、さらには墳丘との間に浅い溝状の窪みとして確認できるほかは墳丘の西側に送電線の鉄塔管理のための山道が取り付けられるなど、奥壁側以外での周溝の存在は明瞭ではなかった。

3号墳は、2号墳から南東へおよそ48m離れて位置する古墳である。本墳は横穴式石室をもつ円墳であり、その規模など詳細については後述する。今回の調査では、現状の墳丘測量と石室内部の実測を行ったほか、奥壁側の周溝にトレンチを1ヶ所設定し、周溝の規模などを確認

することとした。

なお、青谷川1号墳は今回の開発範囲に含まれていない。

(2) 青谷川2号墳

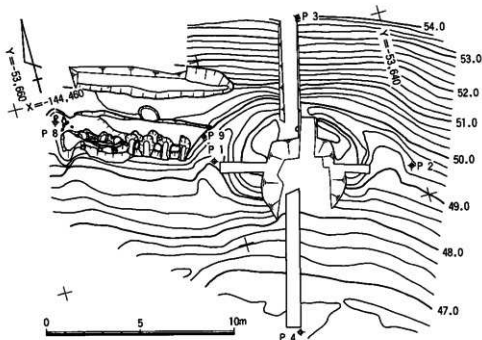
本墳は、墳丘上に大きく「コ」の字形に穿たれている盗掘坑と、不明瞭な周溝痕跡からみて、内部主体の横穴式石室はことごとく壊されて、墳丘盛土や古墳造成土もかなり流出しているものと判断された。そこで調査は、盗掘坑内に堆積した土砂を除去し、わずかながらも石室の痕跡が残されていないか確認すること。また、墳丘及び周溝にトレンチを設けて、土層の観察などから墳丘の規模等について検討することとした。

墳 丘

トレンチは、盗掘坑の位置と丘陵斜面の傾斜にあわせて設定した。各トレンチでの土層の状況は、第6図に東西方向及び南北方向の断面図として示すとおりである。

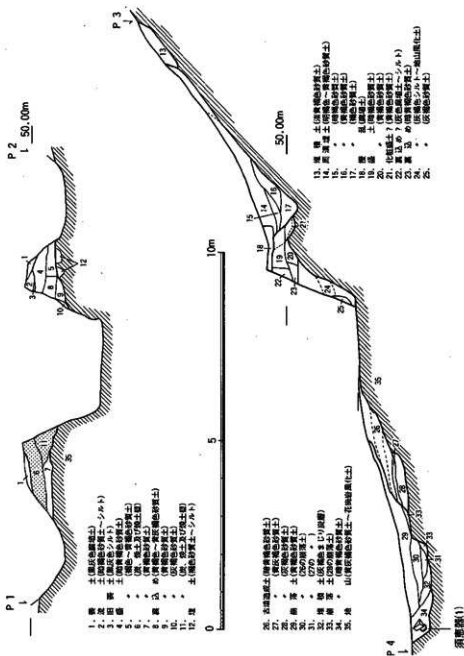
第1層の表土層は薄く、植物の根などにより第2層の流土や盛土の上部などが腐蝕したものである。また、かつて石室の石材を運び出す際に生じたと思われる攪乱層(第13層)や、わずかに残る旧表土(第3層)が認められる。このほか石室の前部には、墳丘盛土や古墳造成土、あるいは石材の盗掘に伴う堆積土がある(第29~34層)。

墳丘盛土とした土層は、石室の北、東、西側、いずれも20~40cmの厚さで2段に積み上げて



第5図 青谷川2号墳墳丘測量図

いる（第4～7, 19～21層）。しかし、それぞれの地点の盛土層には土性、土色においてかなりの違いが認められる。とくに顕著な差として、石室の西側にのみ確認される焼土及び焼土壁や炭を積んだ第6層がある。これは、結果として、本墳の西側に隣接して検出された炭窯の存在を示唆すると同時に、それを破壊して墳丘盛土とした事実がうかがわれる。また、墳丘盛土



第6図 土層断面図

に用いられた土砂は、古墳を構築する過程において計画的に利用されたものであり、周溝を掘り込む段階での土砂を、掘り込んだ位置の墳丘盛土として積み上げている。

古墳造成土とした土層は、石室前部にある第26～28層である。いずれも20cmほどの砂質土を叩き締めて積み上げており、かなり堅い土層となっている。おそらく、この造成土の上面が石室床面であったと考えられる。しかし、検出面は地山削り出しの平坦面と比べてわずかに南に向かって傾斜しており、検出した床面はいくらか流れ落ちているものと判断される。

周溝は、古墳の背面となる丘陵斜面をやや弧状に地形整形したうえで、地山まで掘り込んである。第14～17層とした土層がその埋土にあたる。それらの堆積は徐々に埋まったもの（第15・17層）と一気に埋まったもの（第14・16層）とが認められる。

以上の調査結果から、青谷川2号墳の規模と墳形は、東西方向で直径8.2m、南北方向で同8.2～8.6mを測るやや楕円形の古墳である。墳丘の高さは、周溝の底からみて北側で0.8m、東と西側で1.1mであり、石室の床面よりは2.1mとなる。本墳は斜面上の立地であることから、谷側よりみる外観は墳丘径に対して、より高さの目立つ腰高な特徴ある墳形を示している。

石室

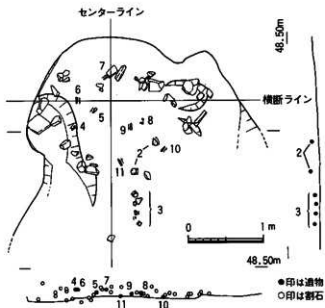
内部主体は小形の横穴式石室と考えられる。しかし、石材はことごとく運び出され、大きな盗掘坑が残された。そのため石室の規模を知ることはできなかった。

けれども、あえてその規模を推定するならば、墳丘上に残された盗掘坑の大きさと石材を全て抜き取ることができたこと、さらに石室床面と考えられる平坦面が盗掘坑の底で検出されたことなどがかりとなろう。

盗掘坑は2.5×4mほどの大きさとあり、石室規模はこの数値以下となる。また、盗掘をまぬがれた床面は、山側では地山を削り出し、谷側では造成土により埋め出しを行っている。しかも、床面上にはわずかに残る側石を掘るための掘り込みが検出された。

これから推定される石室の規模は、石室長4m位で、同幅約1mである。

さらに、土層の積み方から石



第7図 遺物出土状況図

室の高さを推定してみたい。裏込め土には側壁に対応するものと、天井石に対応するものがある。奥壁側では第24層が奥壁に、第22・23層が天井石に対するものとかと思われ、同様に左側壁側では第9・10層が側壁に、第8層が天井石に対応し、右側壁側では第11層が分層されてそれぞれに対応すると思われる。これら裏込め土の厚さを床面より測ると、第24層が150cm、第9・10層が120cmとなる。また、第22・23層の70cm、第8層の40cmという層厚からは天井石の厚みが想定できる。

また、天井石の厚みに関しては、石室前部の崩落土の中に、石材を抜き取ったものの運び出さずに放置したものが含まれており、その測定値とほぼ一致する。天井石としうる石材はいずれも厚みのある長方形で、長さ140cm、幅80cm、厚み50cmのものと、長さ110cm幅70cm、厚み40cmのものとなる。このほかに、側石と考えられる長さ110cm、幅80cm、厚さ45cmの石、長さ110cm、70cm、厚さ50cmの石や、40～50cm角前後の石材数個があった。とくに大振りの石材には広口面を平坦に整えているように見え、石室側石の1段目に使用された石材であろうか。

土層の観察、放棄された石材から推定される石室の高さは、120～150cmの間と考えられる。

出土遺物

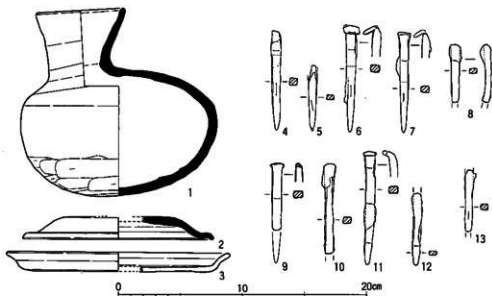
石室内は、厚さ1mほどの土砂で埋まっていたが、その大半が腐植土や墳丘崩落土であり、おそらく石室石材の抜き取り以後に堆積したものであろう。これ以外には床面上に2～13cmの厚さで堆積する黄褐色砂質土が残る。この層には焼土もわずかな含まれるもの、かなり堅く締まっており、その堆積は一度に形成されたものではなく、石室石材の隙間から少しずつ流れ込んだ土砂であろう。

この黄褐色砂質土と床面から須恵器杯蓋(2)、土師器皿(3)、鉄釘(4～11)が出土したほか、石室前部の崩落土(第34層)中には須恵器平瓶(1)が掻き出されていた。

遺物の出土状況は、2の杯蓋片が若干離れて出土し、鉄釘の出土位置と方向、床面一帯に新しい割れ痕跡をもつ割石の散乱などから、出土した遺物は原位置を保っているものとは考えられない。また、割石についても側石を掘るための掘り込みと考えられる窪みの中にある石のほかはいずれも動かされているものであろう。

1は、完形品の須恵器・平瓶である。口頸部は上方にのび、端部は丸くおさめる。胴部は偏球形で、最大径を中央よりやや上におく。口縁部から胴部はヨコナデ調整であるが、頸部と胴部の接合部分についてはナデ調整が施される。底部は手持ちによるヘラケズリを行い、その方向は底部よりみて左回りに工具が動く。口径6.8cm、器高15cm、最大径15.8cmを測る。砂粒を多く含む胎土で、焼成良好、淡灰白色の色調を呈する。

2は、須恵器・杯蓋である。約 $\frac{1}{2}$ を残し、復元口径は15.2cmである。天井部は低く、かつ偏平である。口縁部は一度水平にしたあと、外下方につまみ出す。天井部外面は不調整、そのは



第8図 出土遺物

かはヨコナデを施す。

3は、土師器・皿である。約ノを残し、復元口径は17.7cm、器高1.5cmを測る。かなり浅い皿で、口縁部を上方において外反させる。底部は成形の圧痕が残り、口縁部内外面はヨコナデである。

4～13は、鉄釘である。⁽³⁾ 頭部や先端部を欠損するものが多く、6のみが完形品である。6は長さ8.45cm、身の中央部の幅0.75×0.55cm、頭部の幅1.25cm、同厚み0.3cm、重さ11.3gを測る。頭部のつくりは板状に叩き延ばし、折り曲げている。木質部は身の中ほどより少し上の部分を

遺物 番号	注		重 量(g)	木質部(方向)	頭部形態	その他
	長さ(cm)	幅(cm)				
4	(7.86)	0.60×0.50	(8.0)	有(縦)	A 2 類?	
5	(5.00)	0.60×0.40	(3.6)	〃(斜め)	—	
6	8.45	0.75×0.55	11.3	〃(縦・横)	A 2 類	
7	(7.95)	0.70×0.50	(8.8)	〃(〃)	〃	
8	(4.55)	0.60×0.40	(4.3)	無	—	
9	(5.40)	0.70×0.50	(8.9)	有(横)	B 類?	
10	(7.30)	0.60×0.50	(6.3)	〃(〃)	B 1 類	
11	(9.36)	0.70×0.55	(9.0)	〃(〃)	A 1 類	
12	(5.75)	0.50×0.30	(4.0)	〃(〃)	—	確認調査
13	(4.36)	0.60×0.50	(4.8)	〃(縦)	—	〃

小 結

青谷川2号墳は、直径約8m、高さ約2.3mの円墳である。内部主体は横穴式石室と推定さ

境にして頭部側が横方向、先端部側が縦方向である。6と同種の頭部をもつと思われるものに7があり、4もその可能性がある。

このほか11のように板状に延ばさずにそのまま折り曲げているもの、9のようにやや円盤状のものがある。なお、8については身がわずかにカーブしており、釘以外の可能性も考えられる。

れるが、その石材はことごとく抜き去られている。しかし、石材の掘え付け穴や、土層の観察などから石室全長4m前後、同幅1m前後、同高さ1.3m前後の規模と推定された。

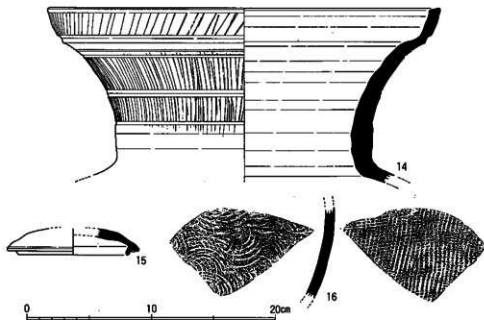
遺物は、本墳の築造時期を示すと思われる平瓶(1)が石室外に掻き出されており、7世紀初頭～前半の頃のものと考えられる。また、床面から出土した杯蓋・皿は明らかに時期の下るものであり、古墳の再利用に伴う遺物である。

なお、2号墳に伴うものとは考えられないが、発掘機材を置くために古墳の東約10mの地点で斜面を削平したところ、第9図に示すような遺物が出土した。付近に新たな古墳の存在が推定されたが、周囲の地形観察や出土地点の精査などからは何らの痕跡も認められなかったため、その性格については不明である。

14は、須恵器・甕である。頸部以下を欠き、口縁部も $\frac{1}{2}$ を残すのみである。復元口径は31.4cmで、灰色～灰褐色の色調を呈する。口縁部は受け口状であり、ほんのわずかに内傾した端面は浅くくぼむ。口縁部外面にはハケ状工具による刺突を施し、頸部には縦方向の条痕と5条の沈線を巡らす。口頭部内面はヨコナデによる凹凸がみられ、わずかに残る胴部には同心円文のタタキが残る。

15は須恵器・杯蓋である。約 $\frac{1}{2}$ を残し、復元口径8.7cm、復元最大径10.6cmである。灰褐色を呈する。かなり小振りの蓋であり、受部端部は面を取るようやや方形におさめ、口縁部内面のかえりは内傾してのびる。天井部は欠損し、つまみは残っていない。

16は、須恵器・甕の胴部破片である。青灰褐色を呈する。内外面ともにタタキを残す。



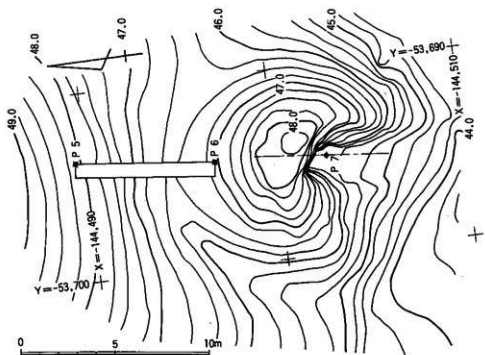
第9図 2号墳周辺出土遺物

(3) 青谷川3号墳

本墳は、保存対象となった古墳である。しかし、開発との絡みで保存範囲を確定する必要が生じた。そこで周溝を含めた古墳の範囲を確認するため、現状での墳丘測量を行うとともに、周溝部分にトレンチを設けて周溝の開口を検出することとした。また、あわせて石室内部の実測を行った。

墳丘

本墳は、現状の墳丘測量図から判断すると、直径約10mの円墳である。墳丘の高さは、現状で1.8m、奥壁側のトレンチで検出した周溝の底より2.6m、推定される石室の床面よりは3.5mとなる。天井石の上には現状で1.2mもの盛土が残り、しかも、かなり緩やかな傾斜面に築かれているために、谷側よりみる外観はかなりこんもりとした高さの目立つ墳形を示している。



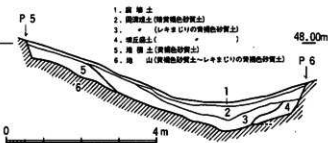
第10図 青谷川3号墳墳丘測量図

今回の調査の主目的である周溝の開口の確認は、トレンチの土層断面図に示される通りである。その位置は石室内の奥壁より測って北へ8.8mの地点となる。この結果をもとに、墳丘測量図と付き合わせて古墳の範囲を確定し、現状保存の処置を取った。

周溝埋土とした第3層は、20～40cm大の角礫を多く含む黄褐色砂質土である。角礫は周溝の

底付近の地山内に認められる。

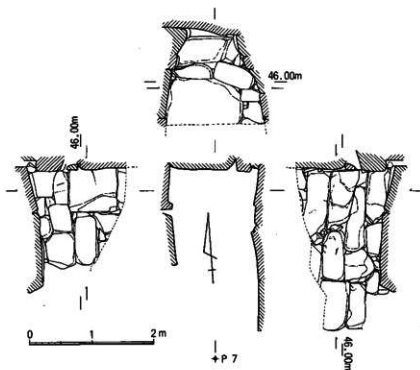
墳丘盛土とした第4層は、周溝の底と同レベルにまで斜面を削平した上に積み上げられたものであり、第3層同様に角礫を多く含んでいる層である。



第11図 土層断面図

石室は、天井石を2枚残す横穴式石室でS6度Wに開口する。石材の確認できる範囲での規模は、全長2.6m、幅1.6m、高さ1.4mである。しかし、すでに側石及び天井石を抜き取った部分も多く、それを含めると全長5~6mとなろう。また、石室内は堆積土で埋まっており、実際には石室幅1.8m、同高さ1.8m位と推定される。

石室の石材は花崗岩である。奥壁は、基本的に4段で構築されている。開口部に向かって右側には一辺1.2mほどの石材を横長に用い、左側には40cm大の石を3段に積み上げ、その上に2枚の石を横口積みで並べて奥壁の高さを揃えている。さらに上部には1枚石を横口積みで積み上げ、20cmほど奥にずらしてもう1石を積んでいる。この石については確認していないが、奥壁と天井石との隙間を塞いだものであろうか。



第12図 石室実測図

側壁は、推定される石室長のはば半分にあたる部分の石材が抜き取られており、袖や閉塞施設などについては不明である。左右両側壁の基底部の石は埋まっており、石材の用い方についてはわからない。2段目以上と同様に長さ1mほどの大型の石材を横口積みをしているものと考えられる。側壁は、確認できる範囲では5段で構築されており、しかも上段に行くにしたがって持ち送りが著しく、天井部での石室幅は床面幅の約半分となっている。

小 結

青谷川3号墳は、直径約10m、高さ約3.5mの円墳である。内部主体は横穴式石室で、その規模は石室長5～6m、同幅1.8m、同高さ1.8mと推定された。

石室内の調査は実施しておらず、本古墳の時期を示す遺物等はない。しかし石室石材の用い方、あるいはその持ち送りが顕著なことなどから、2号墳より古相の横穴式石室墳と推定される。

なお、3号墳は『吉備郡史』⁽⁴⁾巻上に「死道東塚」として記載されている古墳と推定され、現在地元では「シブト塚（死人塚か?）」と呼んでいる。

(前角)

4. 青谷川製鉄関連遺跡の調査

今回の調査では、新たに炭窯が1基検出された。

当初、調査は古墳を対象として実施したものであり、2号墳の調査途中において炭窯の存在が確認されたため、範囲を拡張して調査した。

2号墳の墳丘上に大きく残る盗掘坑の堆積土内には炭や焼土及び焼土壁が流れ込んでおり、しかも鉄滓が出土しないことから窯状遺構が付近に存在するものと推定された。さらに墳丘及び周溝部分に設定したトレンチが調査されるに従って、焼土壁等のみられるトレンチは墳丘の西側においてのみということが判明した。この時点で、墳丘西側の土砂が墳丘盛土として積み上げられたものと考え、窯状遺構の位置は2号墳の西側になると判断した。しかも、周溝の掘り下げ、墳丘端の確認を進めると、明らかに炭窯の窯体を破壊したと思われる青灰色に焼けた非常に硬い面を検出した。その位置は、墳丘の西側周溝の肩口になり、同じ位置の墳丘法面には認められなかった。つまり、炭窯は墳丘の下には築かれていないものと判断された。

調査は、2号墳の西側の丘陵斜面を幅10mの範囲にわたって表土掘削を行った。遺構は斜面立地のため、表土直下で検出された。

構 造

今回検出された炭窯は、大形白炭窯⁽⁴⁾といわれるものである。この炭窯の構造は、原木を炭化させるための窯体と、白炭として消化するための窯外に設けられた作業場（側庭部）を基本として、ほかに焚口及び煙り出しの施設等が付設されるものである。

同種の炭窯は、総社市域においても20例を数え、それらから共通する特徴について先にみておきたい。

炭窯は、丘陵の斜面に立地し、窯体の主軸を等高線とほぼ平行にして築いている。窯体の形状は、長大な長方形で、一方は焚口として口を開け、一方は壁面の中ほどに直径10～20cmほどの煙道を通っている。規模は、焚口から煙道までの窯体全長が内法で6～8m間におさまリ、それに直交した窯体幅は内法で0.6～1.3mで、焚口は0.44～0.58mを測る。窯体の天井については、いずれの炭窯例とも残されていなかったが、側壁の立ち上がりからは「かまぼこ」状の天井になろうと推定される。現存する壁高は0.46～1.15mであり、もともとは内法で1.2～1.3m位ではなかつたであろうか。

この長大な窯体の側面には、8～12ヶの掻き出し口が取り付けられている。白炭をつくるには、赤熱した状態のままの原木を窯体内から取り出し、水分を含ませた炭の粉や灰を被せて消火するという。そのために、燃えている原木を掻き出すための穴が必要となり、谷側となる窯体側面に掻き出し口が穿たれる。

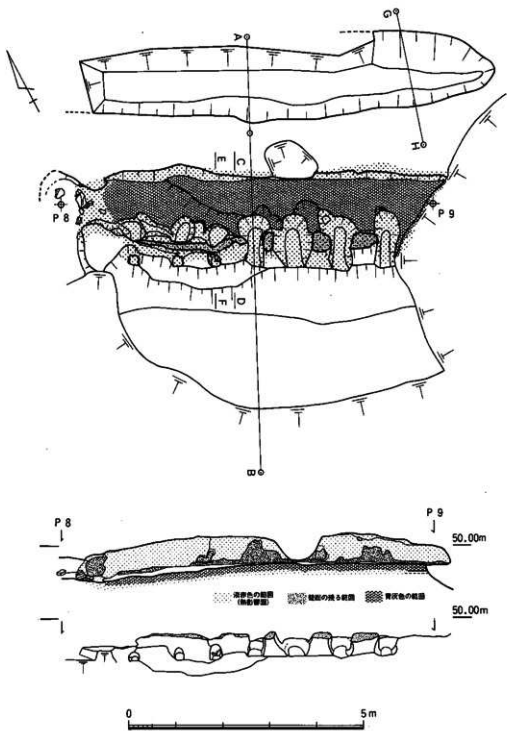
掻き出し口の谷側には、赤熱した状態のままの原木を掻き出したあとで消火するための作業場（側庭部）が付設される。側庭部のほかには、焚口に付属して燃料を追加するためなどの作業場（前庭部）や、煙道に付属した石組の煙突とそれらに伴う煙り出し部の掘り込み、さらには窯体の山側に等高線と平行して掘り込まれた溝（上方溝）が取り付けられる。

さて、今回検出した炭窯では、2号墳周溝により煙道をはじめとした煙り出し部、さらには窯体の掻き出し口の一部まで破壊されていると推定される以外は、窯体、掻き出し口、側庭部、前庭部、上方溝が検出された。

遺 構

窯体は、天井部がまったく残されておらず、その壁体が窯体内に多く落ち込んでいた。また煙り出し部や掻き出し口の一部にまで損壊しているため、その全体については不明である。現存する窯体の全長は7.6mを測り、焚口と、焚口から煙道に向かって最初の掻き出し口との位置関係から長さ約1mの加熱部、長さ6.6m以上の炭化部となる。そして窯体の幅は、炭化部で1.1m、焚口で0.72mを測る。また、天井は残されていないため、現在高で0.72mである。

掻き出し口は、7ヶ確認された。そのうち焚口から奥に向かって3つ目の掻き出し口には角礫が2ヶ、掻き出し口の中に残された状態で検出された。この石については口を塞ぐための詰



第13図 1号炭窯平面図・立面図

め石が一部残されたものであろうか。同様の石は、土層断面の付近においても認められた。ここでの石の出土状態は、焚口から奥に向かって4つ目の掻き出し口が崩れ落ち、その堆積した中にあった。

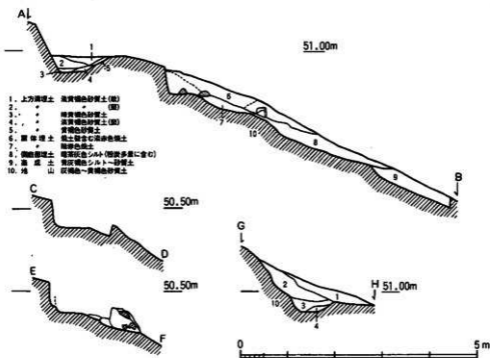
窯体の床面は、わずかに焚口に向かって下降しており、その傾斜角は6度である。また、掻き出し口の位置に対応して床面には浅い窪みが認められる。そして床面は非常に硬く焼け締まっており、還元焼成により青灰色を呈している。その厚さは2号墳の周溝肩口での計測で約16cmとなり、その下には熱の影響をうけて赤橙色に変色した熱影響面が6cmほどの厚みで確認された。

焚口は、山側の壁面がおおい被さるようして残存していた。また、焚口の手前には10~30cmの角礫が置かれており、焚口の閉塞に伴う石材と推定される。

前庭部は、開発区域外となる関係と、付近の地形観察より、すでにその大半は流失したものである。

側庭部は、やや傾斜した面として検出された。ここに堆積した土層は、粉炭が多量に含まれているため暗茶灰色を呈している。窯体内はまったく炭を残さず、天井部や壁体の剝落したものと熱をうけて赤橙色になった土砂であり、側庭部に堆積した土層とは対照的である。

窯体の北方、山側には等高線に平行して掘り込まれた溝（上方溝）が検出された。上方溝は



第14図 断面図

開発範囲外にまで延びており、現存長8.8m、幅1.6m、深さ0.4～1mを測る。この溝の用途は上方斜面より流れ落ちてきた雨水等を排水する施設である。

小 結

今回調査を行った1号炭窯は、煙り出し部などを損壊するものの、その他の施設については整った状態で検出された。

1号炭窯の時期を示す遺物はまったく出土していないが、1号炭窯は2号墳によって破壊されていた。このことから炭窯の操業時期の一端を知りうることとなった。古墳は7世紀初頭～前半の築造であり、炭窯はこれを超える時期のものとなる。同様な例は、総社市で2例、津山市で1例が知られている。総社市久代の第2団地内遺跡群では沖田奥6号墳と3号窯状遺構との例、総社市新本の長砂谷1号墳と第2号窯状遺構との例、そして津山市鯖込遺跡の例である。沖田奥6号墳の築造は7世紀前半、長砂谷1号墳の築造は7世紀中頃、鯖込遺跡での例は7世紀後半と報告されている。そして今回の青谷川2号墳の築造が7世紀初頭～前半であり、4例ともかなり近い築造の時期を示している。このことから窯体の側面に掻き出し口をもつ大形白炭窯の操業時期の下限を導き出すのは困難であるが、その操業の一端を示したことになる。

(前角)

5. ま と め

このたびの調査では、青谷川古墳群3基のうちの2基について実施した。調査の結果、2号墳は7世紀初頭～前半の横穴式石室墳。3号墳は保存のための調査を行ったのみで、築造時期は確定できないが、横穴式石室の形態からは2号墳より古相の古墳と考えられる。ほかに開発範囲外となる位置に小型の横穴式石室を内部主体とする1号墳があるが、石材の大半が抜き取られているために築造の時期は不明である。しかし、2号墳と3号墳との関係では3号墳の築造後に2号墳が築かれており、その移動は谷の奥に向かっていく。このことから、1号墳は2号墳のさらに谷奥にあり、2号墳の築造後に1号墳が築かれた可能性が高い。また、石室の形状や構築法からも同様に推定される。

さらに、2号墳の調査途中で、新たに炭窯が検出された。炭窯は一部損壊しているものの、窯体、側庭部、前庭部、上方溝がよく整った状態で検出された。従来、炭窯の時期については、遺物の出土が僅少で、その把握はできなかった。しかし、今回の調査例のように、炭窯を廃棄したのちに古墳が築かれるという事実は、古墳の築造時期より炭窯の操業時期の一端を知ることとなった。同様な例は、総社市において他に2例、津山市で1例の報告がなされており、青

谷川1号炭窯を入れると4例となる。この4例の炭窯はいずれも7世紀に築造された古墳によって壊されており、窯体の側面に掻き出し口を取り付けている炭窯のすべてではないにしても操業時期の下限としうる可能性がでてきた。

- 註1. 1989年6月～同年10月にわたり、総社北公園造成地内で発掘調査が行われた。新たに古墳、箱式石棺、古墓などが検出され、長期にわたった墓域を形成していたといえる。
- 註2. 1986年2月～1987年8月にわたり、第2団地造成地内で集落3、古墳36、製鉄遺跡5の発掘調査が行われた。特に製鉄遺跡では、製鉄炉約60基、窯状遺構16基が検出され注目された。報告書近刊。
- 註3. 鉄釘頭部の形態分類は下記の文献による。
田中彩太「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」(『考古学研究』第25巻第2号 1978)
なお、出土した鉄釘については、デシケーターを用いての保存処理を行っている。
- 註4. 永山卯三郎『吉備郡史』巻上 1937年
- 註5. 兼康保明「古代白炭焼成窯の復元」(『考古学研究』第27巻第4号 1981)
- 註6. 註2の第2団地造成地内の発掘調査で16基、市内新本の長砂谷製鉄関連遺跡で2基、市内見延で1基、今回の調査遺跡で2基の炭窯が確認されている。
- 註7. 総社市教育委員会「長砂谷1号墳・長砂谷製鉄関連遺跡」(『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』6 1988)
- 註8. 津山市教育委員会 安川豊史氏の御教示による。



1. 調査地全景 (南より)

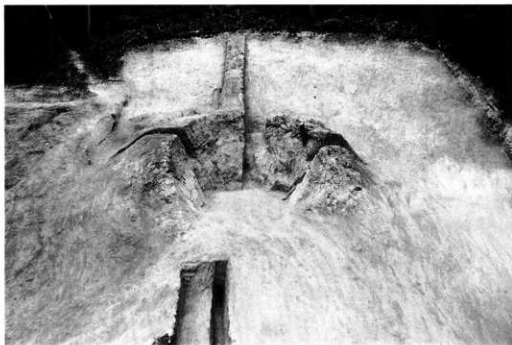


2. 調査地全景 (南より)

図版 2



1. 2号墳調査前（南より）



2. 2号墳調査後（南より）



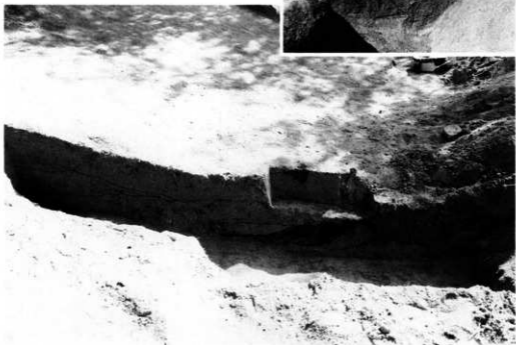
1. 石室床面出土遺物 (南より)



2. 石室前部トレンチ出土遺物 (西より)



1. 奥壁側トレンチ断面(東より)



2. 石室前部トレンチ断面(西より)



1. 3号墳調査前（南より）



2. 奥壁側トレンチ断面（北西より）



1. 側庭部より竈体をのぞむ (南より)



2. 焚口より竈体をのぞむ (西より)



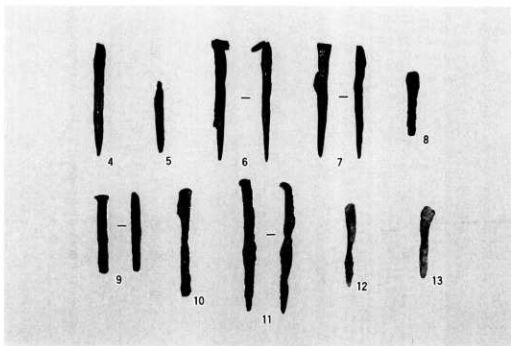
1. 掘き出し口の残石 (南より)



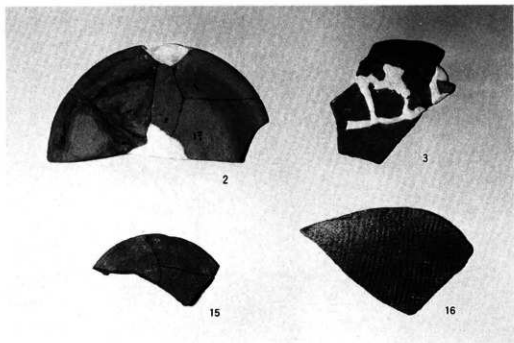
2. 炭窯と古墳 (南より)



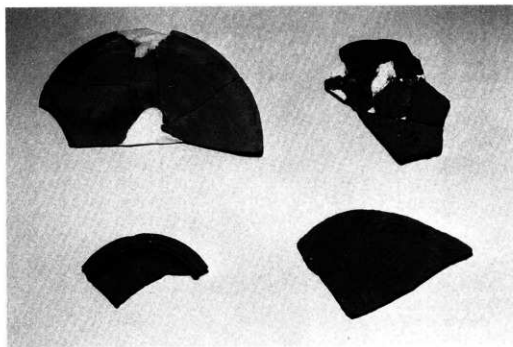
1. 須惠器



2. 鐵釘



1. 須恵器・土師器 (表)



2. 須恵器・土師器 (裏)



1. 須惠器



2. 3号墳石室

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 8

青谷川古墳群
青谷川製鉄関連遺跡

1990年3月 印刷

1990年3月 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号

